E 14　戸外生活空間に関する研究（第５報）
香里団地と平城ニュータウンの道に対する居住者の評価

奈良女大家政　北口　照美

目的　住居地域の道は主として住民の日常生活のための空間である。ここは、車も通るが人々が主人公であり、しかも買物や通勤・通学のための通過手段だけでなく、歩くこと自体を楽しむ散歩や人々との話合いや子供達の交流が展開される目的空間であり、また、自分の家が外に対する顔として、町並みの景観や雰囲気が醸成される場でもある。本研究は、人々が日常利用している道についての意識調査を行い、道や、歩行者専用道に対する意識を知ることにより、住宅地区内の道のあり方を検討するものである。

方法　対象は、香里団地（建設年S.33、大阪府）、平城Ｎ．Ｔ．（S.47、奈良県）。質問紙法、訪問による配布・回収で留置法とした。　調査時期は昭和60年 7月から11月。

結果　回答数は香里団地の独立住宅 118答、集合住宅 153答、平城N.T.の独立住宅 148答、集合住宅 158答。道の便利さへの評価は全体に高い。安全性は、40才以下の若い年代に悪く、また、歩行者は70％強が良いとするが、自転車利用者は平城Ｎ．Ｔ．の集合住宅を除いて良い評価は半数以下となる。道幅は集合住宅に不満が大きい。照明に男性の不満は少ないが、女性の評価が低く現状の数量では不十分であるといえる。清掃や樹木の手入れには、40 ~50才以上に悪いと感じられている。平城Ｎ．Ｔ．の道は、機能的な面での評価がよい。香里団地の道は機能的な面以外にも、樹木によって醸し出される楽しさ、雰囲気などの快適さが良いと評価され、並木道の存在が果たす役割が大きいと考えられる。快適な道空間の創造に、人工的な装置の導入や樹木の管理の必要性と共に、樹木は快適な生活環境の創造を考える上で重要な一要素として考られる。